

私は、この長期休暇を利用してタンザニアで一か月間公衆衛生と医療のボランティア活動、インターンシップを行いました。なぜかタンザニアかという、本来であれば長期休暇にはイギリスの病院でボランティアに携わりたかったのですが、現在イギリスの病院は COVID-19 の影響でボランティアの受け入れを停止していることから、将来従事していきたい発展途上国へと目を向け、この機会に現地での体験をしてみたいと思ったからです。私はこれまで発展途上国の医療や公衆衛生に目を向け、様々な本やドキュメンタリーを見るようにしていましたが、リソースごとに内容が異なっていてそれぞれのメディアの目的に合うように現状の一部を切り取り強調しているように感じていました。そこで、実際に現地に赴き、現地の人との交流やアウトリーチを通して発展途上国の正確な状況を学ぶことにしました。

最も記憶に残っている活動は、マサイ族が住む村へのアウトリーチです。医師とともに村まで車で3~4時間かけて赴き、健康診断と必要なら薬の処方をするのを手伝いました。彼らが住んでいるところは病院のある街から100kmほど離れていて、体調が悪くなったときはあきらめる事しかできないと言っていました。また、ワクチンや薬などは伝統的に使わないことが推奨されていたり、それらの存在を知らないことすらあるそうです。そもそも現在開発されているワクチンはほとんど要冷蔵ですが、電気の供給が全くない郊外では冷蔵庫が使用できず、地理的にワクチンを受けることが不可能な人も多くいると思います。ですから、このようなアウトリーチは彼らにとってとても大切だそうです。

他にも、病院でのレクチャーで発展途上国特有の典型的な病気、例えば肺炎、鎌状赤血球症（貧血）、寄生虫、骨髄炎などについて学びました。それらの病気は栄養失調や免疫力が低下している人が罹りやすく（貧血は遺伝的なものなので除く）、日本やイギリスでは予防可能だったり、罹っても重症にはなりにくかったりします。ここで、発症と生活環境が密接に関わっていることを痛感しました。そして生活が変わらなければ再発するリスクはとても高い訳で、病院とは、ただ病気を治すところではなく病気を防げるようにするところであるべきと思うようになりました。つまり、発症した原因を探りそれを改善できるような機関を導入、また教育をする事で、予防できるようにするという事です。実際イギリスでは Multi-disciplinary-team というソーシャルワーカーやカウンセラーらによるチームを GP（日本のかかりつけ医のようなもの）が紹介することがあります。これによって、医療以外の生活面や精神面でのサポートを得ることが出来るのです。寄生虫や肺炎は予防することが比較的容易であることから、患者さんに予防する方法を教えたり学校で衛生について教育したりすることが大切です。また、必要であれば患者さんがアドバイスをもらえたり頼れる外部機関を作ることで、病気で苦しむ人を減らすだけでなく病院の負担を減らすことにもつながり、余裕ができる分よりよい医療を提供できるようになり、好循環が生まれると思います。

また一か月滞在したことで生活上の問題点を知ることができました。滞在先では

Wi-Fi はなく、基本的に 3G 回線のデータを利用します。断水、停電どちらかが大抵一日一回起こり、温水が出る日はラッキーです。それでも私はタンザニア内で比較的発展している地域に滞在していた訳で、地方地域では十分に水道を使える人は半分以下です<sup>1</sup>。ただ、状況は改善されつつあることも事実です。例えば、清潔な水にアクセスできるタンザニア人は 2015 年から 2020 年にかけて 900 万人増えました<sup>1</sup>。都市部では子供たちは無料で学校に通うことができ病院ではワクチンを無料で接種しています。そして、一歳の誕生日を迎える前に亡くなってしまう赤ちゃんは 25 人に 1 人から 33 人に 1 人に減りました<sup>2</sup>。（※日本は 500 人に 1 人、イギリスは 300 人に 1 人<sup>2</sup>）つまり、確実に教育やインフラ整備、経済的な支援が功を奏しているのです。しかし、都市部が発展するほど国内の健康格差が広がっていくのも事実です。ですから、このような支援を今度は都市部ではない地域にも広げられたら良いと考えます。

“Pole Pole” これは、焦らずゆっくりという意味のスワヒリ語です。タンザニアでの生活は時間に縛られず開放的であったともに、スケジュール通りに予定が進まない（8：30 出発予定だったがドライバーは 10：00 に迎えに来た）など大きな文化の違いに戸惑うことが多々ありました。しかし、逆の立場として同じようなことをタンザニア人は現在感じているのではないのでしょうか。というのは、現在の途上国への支援とはざっくりいうと先進国風のシステムを導入して開発を行うという方法です。ですから、きっちり時間通りに物事を進めることを強制させられますし、英語が母国語より重視されたり、食べ物が洋風になっていったりします。つまり、発展することと洋風化することがほとんど同一となってしまっているのです。私が、時間を守らないことに困惑したように、タンザニア人は時間通りに動かなくてはならないことに困惑しかねません。また、洋風が悪いという訳ではありませんが、開発を急ぐあまり今まで長い時間をかけて形成された文化や伝統をないがしろにした開発は、最終的に物質的には充実していても精神的な充実は得られないと思うのです。どのような形がいいのか明確な答えは出ていませんが、その国の伝統や文化を尊重し共存できるような支援に切り替えることが必要だと思います。間違っても、先進国の方が優れているので、途上国は先進国のようにならなければならないというスタンスは先進国のエゴなのではないかと思います。

このように、現地に行かないと考えつかなかったようなアイデアや、見識を得る事ができたと思います。また、今後大学でどのようなことを重点的に学びたいか、また将来どのようなことを研究していきたいかより具体的なイメージが沸いてきました。これらの貴重な経験を生かして、まず大学のアプリケーションに生かしていきたいと思います。

最後に、タンザニアでの活動やアクティビティで訪れた自然公園や滝の写真等をお見せしたいと思います。



3-6歳の子供たちが通う学校で歯ブラシの使い方を教えました。(写真一枚目：校舎)



マサイ族が住む村へのアウトリーチの時の様子



ランゲラ自然公園の周辺のサファリで見られる野生の動物達

余談にはなりますが、タンザニアでは日本やイギリスでは絶対に見られないような素晴らしい景色と動物を楽しむことができます。またタンザニア人はとてもフレンドリーで英語を話せる人も割と多いです。直行便はなく日本やイギリスからだと距離はありますが、是非機会があったら訪れてみることをお勧めします。

<参考文献>

<sup>1</sup> <https://washdata.org/data/household#!/dashboard/new>

<sup>2</sup> <https://www.who.int/data/gho/data/countries/country-details/GHO/united-republic-of-tanzania?countryProfileId=40f06adc-047c-435c-b576-ebd4da789bb2>